桜大臣の姫君

第四回

森谷明子　川野隆司 絵

〈前号のあらすじ〉

晩夏、姉の桜女御は息子二の宮を残して静養に宮中を出る。行先は不明。そんな矢先、父の政敵の息子明雅への下へ、那珂姫の親友尚侍から手紙が届く。手紙を伝手に尚侍に会い、尚侍づき女官の三の宮の懐妊を知らされる。女官の三の宮懐妊で苦悶した父桜大臣は病に臥す。病は回復するが、体は動かない。半月後、尚侍女官は、帝の第三皇子を産み世を去る。

父の桜大臣（さくらのおとど）が病床について以来の忙しさは平穏な頃が思い出せないほどで、気づけば夏が過ぎていた。屋敷に戻った桜大臣の世話は初野（はつの）が一手に引き受け、宮中では那珂姫（なかひめ）ともえぎが協力して二の宮の世話に当たる。みな、その日のことで精一杯の日々だったのだ。

風がすっかり冷たくなったある朝、那珂姫はもえぎと話